

平成 23 年 2 月 12 日

大久保啓次郎

福澤諭吉と朝鮮

～福澤諭吉が「朝鮮の文明開化」に燃やした凄まじい情熱～

1. 福澤が朝鮮と深く関る契機

石坂先生のお話によれば、福澤諭吉の門弟でもあり、大正・昭和の著名なジャーナリストで貴族院議員にもなった竹越与三郎は、「福澤諭吉は朝鮮に恋した」と言っている。

明治初期の頃、福澤は朝鮮に無関心であった。明治 8 年に発生した江華島事件でも、「亜細亜諸国との和戦は我栄辱に関するなきの説」を 10 月 7 日、郵便報知に投稿し、「日本が未だ真に開化の独立国と言えざるは、欧米諸国の文明に及ばないからであって、アジア諸国に劣るために非ず。従ってアジアの国に勝っても何ら名誉となさず。むしろ国の独立に害あり」と発言している。

福澤が急激に朝鮮に関心を強めたのは、明治 10 年代後半からであり、早くても明治 15 年に時事新報が発刊されてからである。以来、明治 33 年（34 年長逝）まで 18 年間、「朝鮮の独立」のために、朝鮮に文明を注入しようとする福澤の熱き思いは、終始一貫して不変であった。

朝鮮が開国してから、朝鮮の開化派の人々が続々と日本にやって来た。そのうち数人が福澤の自宅に来て、朝鮮の国内事情を話したのが、朝鮮と関る契機となった。

特に、金玉均、朴泳孝 らとは、深く関ることになる。

しかし福澤が隣国の文明化を助けようとしたのは、開国の行き掛かりだけではなかった。

「世界の形勢は文明の進歩と共に兵備も日に増進し、「併吞」も増進するは自然の勢なり。もし今の支那国を支那人が支配し、朝鮮国を朝鮮人が支配すれば憂えず、万一西洋人の手に之を授るごとき大事となったら如何。あたかも隣家を焼いて自家の類焼を招くに異ならず。西人東に迫るの勢は火の蔓延するがごとし。我輩が朝鮮に政府の注意を喚起する所以なり。」（時事新報「朝鮮の交際を論ず」明治 15 年 3 月 11 日）

と、時事新報に掲載された最初の朝鮮論で語っている。

2. 壬午軍乱

壬午軍乱の発生を知った福澤は、すぐさま「朝鮮の変事」（明治 15 年 7 月 31 日、8 月 1 日）と題して社説を書いた。

福澤の判断は、政府の方針と殆ど同一であったが、重要な一点が違っていた。福澤は、

「必ずや充分の軍備なかる可らず」と念を押したが、政府は対応しなかった。

福澤が、「軍備兵力の充分なる要す」理由を、次のように述べたにも拘らずである。

「朝鮮の逆徒の実勢を審にする能はず、万全の軍略に出ん為ばかりでなく、支那の関係あればなり。過日支那人の加筆起草したる米韓両国の条約案に[朝鮮は中国の所属たり]と強て宣言せしめたるほどなれば、日本は・・・・」

日本が「充分な軍隊」を派遣しなかったために、軍乱は清国軍によって鎮圧され、朝鮮の開化派は窮地に立たされる。日本の立場も清国に比し弱くなる。

福澤の助言どおり、充分な軍隊を派遣して壬午軍乱を日本が鎮圧していれば、その後の日韓交渉史も違った展開になったかも知れない。少なくとも、朝鮮の開化派にとって致命的となった甲申政変は発生しなかったであろう。

しかし、その時点では、日本は充分な軍事力を保持していなかった。したがって「政府は対応しなかった」と言うよりも「政府は対応出来なかった」と言うべきかもしれない。

福澤は、「東洋の政略果たして如何せん」（明治15年12月7日、時事）で壬午軍乱後の日清韓三国の関係を改めて見直した。

「我が東洋の政略は支那人に害せられたりと言わざるを得ず。・・・・我輩は愚かにも数年前を回顧すれば、日本政府が内治に注意し、巨額の資本を鉱山、築港に投資したるに賛成せり。もしこの資本と精神とを兵備の増強に費やしたならば、今日の急を招く事なからん。ただ既往の無見識を独り懺悔するのみ。」

3. 甲申政変

明治17年12月4日、金玉均、朴泳孝ら独立党のメンバーがクーデターを起こして、事大党・首脳部のメンバーを暗殺し、独立党による新政権を樹立しようとした事件である。政変は、清国軍により3日間で鎮圧された。計画には竹添公使が関与していたことが明らかになっている。それ以外は公表されていないが、その後の調査や、関係資料で、政府や民間にも何らかの形で関与した人がいた事は、公然の秘密になっている。

井上角五郎（慶應義塾出身）は、福澤家の家庭教師を務め、福澤の推薦で後藤象二郎の秘書となり、世に出る機会を待っていた。明治16年1月、福澤から朝鮮の「文明開化」を託され朝鮮に渡った。新聞発行で朝鮮に文明開化を注入するを任務とした。

彼は、独立党に加担して政変を企てた一人である。

甲申政変が頓挫した後、金玉均、朴泳孝らは井上角五郎の斡旋で、仁川から長崎に逃げ延びた。福澤の指示で石河幹明（「福澤論吉伝」の著者）が彼らを迎えに行った。石河の案内で三田の福澤邸に着いた彼らを福澤は「よく生きていた。おめでとう」と迎え、シャンペンで祝杯を上げた。金玉均は「大体計画通りに進んだところ、支那兵に裏切られて失敗しました。臆病な竹添でなく花房公使であつたならと残念でたまりません」と謝った。日本政府は自分らを朝鮮政府に引き渡すであろうかと心配すると、「い

かに日本の政府が軟弱であっても、世界への面目上、国事犯である君らを渡すはずはない。日本の世論も許さない」と保証し、しばらく自宅で形勢を見るようにと勧めた。

（「福澤諭吉伝」第3巻：346頁～347頁）

福澤は亡命者を別邸に匿いながら、日本政府の和平方針を承知の上で、なお世間に向けて、甲申政変での支那の対応を非難する強硬論を、社説で書き続けた。

明治21年1月2日、井上角五郎は突然警視庁に拘引される。角五郎はこの際甲申政変の真相を明らかにし、禍が福澤に及ばないようにと決意する。検事は、黒田清輝に提出した「朝鮮内乱顛末書」を示し、「福澤の指図で朝鮮事件に関係したのではないかと詰問するので、角五郎は「井上馨伯の指図による」と答える。福澤も角五郎の拘引直後に家宅捜査を受け、3月13日に、参考人として出頭せよと召喚状を受け取る。

「実際に先生を犯罪者とするの考えはなかったろうけども、政府内部の事情に於いて、甲申政変は全く福澤等の企てたものとして、一切の責任を他に嫁するの必要があったのであろう」（福澤諭吉伝）

「しかし、客観的には、福澤諭吉の政変への関与は否定出来ないものだった。

日本政府は、井上馨が竹添公使を通して、金玉均らを教唆して政変に至らしめた。福澤は直接に、又、井上角五郎を通して間接に、金玉均らを教唆して政変に至らしめた。」（杵淵信雄著：「福澤諭吉と朝鮮」）

井上角五郎は福澤が残した「京城変乱始末」について次のように語ったと言う。

「この始末書で先生は第三者の地位にたっておられるが、金玉均、朴泳孝一派の挙は当初から与り聞かれたところである。先生は、常に余は作者で筋書きを作るのみ。筋書きが舞台上で演じられるのは愉快であるが、役者の如きは誰でも構わない。それによる名利などの念は毛頭なしと語っておられたが、金・朴の一举では作者たるに止まらず、自ら役者を選び、役者に教え、道具立て万端指図された事実がある。」（福澤諭吉伝）

「作者は福澤で、演出者は井上&竹添、役者は金玉均・朴泳孝一派か？」（杵淵信雄）

後年、井上角五郎は、政変に使われた刀剣、爆薬類は、福澤を通じて入手したものと語っている。（葛東介著：「金玉均」⇒「近代日朝関係の研究」）

井上角五郎は、保釈されることなく8月1日によりやく開廷された公判で、重禁固5ヶ月、罰金30万円を言い渡された。証拠となったのは角五郎が朝鮮人と筆談した時の便箋である。「伊藤・井上参議が国政を独擅し、金玉均を助けるべしと竹添公使に訓令した」と書かれていた。

4. 「脱亜論」が執筆された背景

甲申政変の失敗による福澤の挫折感は、筆舌にし難いものであった。

政変後しばらくの間、福澤は感情をむき出して、激しい口調で強硬論を書き続ける。「朝鮮事変」（明治17年12月15日、時事）で、今回の事は、「朝鮮国内の変乱にして、

在朝鮮の日本国人に毫も関係なし」と強調する福澤は、いささかむきになっていると言わざるを得ない。

「我日本国に不敬損害を加えたる者あり」（明治 17 年 12 月 18 日、時事）で、清軍の出動は慮外であり不法であると糾弾した。しかし清軍の反撃を一方的に断罪するのは、無理であり、片手落ちである事を、感じたはずである。福澤は井上角五郎の通信で、現場の状況を判断し得る立場にあった。

「朝鮮事変の処分法」（明治 17 年 12 月 23 日、時事）で、「今回の朝鮮事変は日本、支那、朝鮮の三国に連帯するの一大事件にして、この三国中、支那と朝鮮は致害者にして、日本独り其被害者たり」とした。日本公使館の加担なくば事変そのものが生じなかった可能性については目を伏せた断定である。

甲申政変の翌年 1 月末から 2 月初めに、朝鮮では独立党の親類縁者に対する容赦ない処罰が行われた。金玉均、徐載弼、徐光範の父母妻子は絞罪となり、洪英植の遺体に恥辱が加えられ、政変に参加した独立党員の従者と幼子を含む家族までが処刑された。福澤は「朝鮮独立党の処刑」（明治 18 年 2 月 23 日、26 日、時事）で、事大党を厳しく批判した。「今の事大党政府の当局者が能く人を殺して残忍無情なるに驚かざるを得ず。野蛮と評せんよりは妖魔悪鬼の地獄図なり。・・・この地獄図の当局者は誰ぞと尋ねるに、事大党の官吏にしてその後見の実を有する者は即ち支那人なり。・・・我輩は千里遠隔の隣国に居り、固より其の国事に縁なき者なれども、この事情を聞いて唯悲哀に絶えず、今この文を草するにも涙落ちて原稿紙を潤すを覚えざるなり。」

5. 「脱亜論」をめぐって

甲申政変の失敗による、福澤の「挫折感と憤激の爆発」の下に、執筆された社説が、「脱亜論」である（明治 18 年 3 月 16 日、時事新報）。「脱亜論」をめぐっては、丸山眞男を筆頭に、様々な学者の意見・解釈があるが、筆者の疑問点と見解を述べてみたい。

まず、福澤はなぜこの時期に「脱亜論」を発表したのか？ 発表の真意は何か？

「脱亜論」は、「朝鮮への絶交状」であり、「朝鮮の文明工作化への敗北宣言」である。福澤は、この時期本当に、朝鮮との交際、朝鮮への文明化を諦めたのだろうか？

しかし、福澤の朝鮮への熱き思いは、「脱亜論」発表後も続き、長逝の 1 年前（明治 33 年）まで朝鮮を憂えて、「国民の覚悟」（明治 33 年 7 月 28 日、時事）で、北清事変と朝鮮の関りに触れている。福澤が朝鮮に言及した最後の論説である。

「満州の露国の運動は止むを得ざる次第にて・・・我が国は隣国の騒乱に乗じ土地を割取するは、断じて為さざる国是にして、・・・日本は全力を挙げて朝鮮の安全を維持する必要あり。日露共同して任に当たる筈なれど、露国は朝鮮まで引受くる余裕なし。いよいよの場合には、日本独力にて朝鮮の安全を維持する覚悟必要なり。」

実際に、「脱亜論」が発表になった段階で、「福澤は、朝鮮・清国を含めたアジア諸国

との交際を絶った。特に、朝鮮との連携は終わった。」と決めつけている学者が多い。確かに、日清戦争（明治 27 年）までの時事新報の社説を見ると、福澤は、朝鮮問題よりも清国の問題を多く取り上げている。しかし、其の時期は、朝鮮の統治に関しては日清協調の時節であり、当然の事である。明治 27 年から明治 33 年までは又、連日のように「朝鮮への熱き思い」を、時事新報に掲載している。

「閔妃暗殺」の著者：角田房子は、其の著書で福澤諭吉を「侵略主義者」と論じている。「閔妃暗殺」の取材で韓国に行き、福澤諭吉が韓国であまりにも評判が悪いので、「帰国してから、慶應義塾福澤研究センターで調べた」と書いてある。

調べた割には余りにもお粗末な結論であるが、所詮付け焼刃なので、仕方ないだろう。

「脱亜論は、朝鮮を〔誘導するに値しない国〕と見限っての〔訣別の辞〕である。福澤の〔連携論〕はここで終わった。一方的に〔アジア東方の悪友〕を謝絶した福澤は、その後の 10 年間、日清戦争勃発の直前まで、朝鮮については、ほとんど言及していない。」

「今さら日本の札に福澤の顔を見つけて怒るなど、意味のない事だと思う。あの時代の日本人はみな帝国主義者、侵略主義者だったので、福澤も例外ではなかった。私は最近まで脱亜論を読んでもいなかった。」というのが、角田房子の「福澤認識」である。

次に、「脱亜論」の文章の最後の方にある、「支那朝鮮に接するの法も、正に西洋人が之に接するの風に従って処分す可きのみ」の解釈の問題である。

福澤に対して批判的な学者は、この字句を捉えて、「西洋がやっているように植民地化せよ」＝「侵略せよ」と解釈し、福澤を「侵略主義者」と決めつけている。

一方、福澤の「脱亜論」を擁護する立場の学者は、この字句の解釈を余り深く考えていない。「西洋人がやっているように付き合え」とでも解釈すればよいのか。

要するに、「脱亜論」全体から見て、枝葉末節な事なので、問題視していないのである。

福澤は機会ある度に、「日本に朝鮮を吞食する意図なし」と繰り返し説き続けてきており、福澤の朝鮮との関りの中での言動を見れば、福澤を「侵略主義者」と主張する人には、筆者は断じて同意出来ない。

しかし、いくら「挫折感と憤激の爆発」の下とはいえ、朝鮮の命運もこれまでとして、「朝鮮人民のために其国の滅亡を賀す」（明治 18 年 8 月 13 日、時事）と極論したのは、どうしたことか？　とても、本音で福澤が論説したとは、思えない。

要するに、「朝鮮のような野蛮な国は亡びても、英国に併呑されれば、強大な文明国の一員になる訳だから、朝鮮国民は皆幸せになり、他国民から羨ましいと、思われる」という主旨である。甲申政変後、清国と朝鮮に対して、防戦一方であった日本政府も、さすがに慌てた。時事新報は治安妨害の理由で、一週間の発行停止となる。福澤が用意していた、続編「朝鮮の滅亡は其国の大勢に於いて免る可らず」は、掲載の機を失う。これも大いに問題になったであろう論説である。

「……朝鮮の腐敗は極度に達し、大勢を挽回する術がなきこと幕末と同断であり、西洋列強の目にはすでに朝鮮王国なし。」という主旨の社説になる筈であった。

前述の、「閔妃暗殺」の著者：角田房子は、其の著書で、次の評論を紹介している。
「[朝鮮人のために其国の滅亡を賀す]を紹介した旗田巍（東京都立大学名誉教授・朝鮮史研究会会長）は、[文明の名による侵略の肯定であり、其の基礎には、朝鮮は自ら文明化しえないという考えがある。これでは開化派への援助も、結局は日本の朝鮮支配の手段とならざるを得ない。]と指摘している。」（光岡玄・桜美林大学講師）

6. 日清協調の時節

甲申政変後、明治 18 年～明治 27 年までは、日本は朝鮮政略に関して、清の李鴻章や袁世凱と連絡を緊密にして、協調外交を取らざるを得なかった。

揚子江で宣教師殺傷事件が発生し、列強は連合して上海を占領するとの報道が達すると、福澤は「支那の交渉事件は我が国の好機会なり」（明治 24 年 10 月 15 日、時事）で、仲介役を買って出よと提案する。

「・・・朝鮮の将来についても日清商議すべきこと多し。両国蟠りありて釈然たるを得ない原因は、・・・あるいは朝鮮関係にありとすべきか。我が国の仲裁で紛議を防ぎ、清国の損害を免れしめれば、年久しき日清間の感情は一転し、両国の間に東洋の大計を講ずるの端緒を開くに至るべし。」

その後の社説も、「清国は朝鮮を所属となし、我が国は独立となす問題あれど、畢竟するに独立も所属も名義上のことにして、実際はその国の実力如何にあり。支那政府は歴史上の関係より所属論を唱へれど、朝鮮に独立の実力あれば捨てて問わず。我が国も名義上の空論を止め、共に赤心を披て東洋将来の利害を談じ、両国一致して朝鮮を助け、先ずその実力を得せしめて、遂に独立国の名をなさしむるこそ、今日の急務なり。」

（「大英断を要す」明治 25 年 7 月 19 日、時事）といった類が、多く見受けられる。

「福澤論吉と朝鮮」の著者：杵淵信雄は、上記の「脱亜論」後に於ける福澤の、清国との協調外交を良しとする論説について、下記ように解説している。

「甲申政変直後に清国の非を糾弾し、脱亜論で老大国との交友を謝絶した論吉の姿はない。しかし之を以って論旨の変更、変節と咎めるのは皮相である。政変失敗の激情は去ったのである。確かに「心に於いて悪友」を謝絶したには相違ないが、共に文明化に進む余地があるならば、何ら拒絶するものではない。論吉にとって大事なものは現実であつて、見せかけの論理の一貫ではない」（杵淵信雄）

しかし、筆者はともかくとして、福澤に批判的な学者・評論家に対して、上記のような論理は通用するのであろうか？

したがって杵淵信雄流に解説するならば、福澤は、「心に於いて悪友の朝鮮」とも謝絶したが、現実の朝鮮が文明化に向けて進もうとするなら、交際を拒むものではない。ということになる。

7. 東学党の乱

明治 27 年 2 月、韓国の全羅道で農民達の反乱が起き、やがて全羅道の首都全州をおさめてしまった。これが東学党の乱である。福澤は、「朝鮮東学党の騒動に就いて」

(明治 27 年 5 月 30 日、時事) で、政府の威厳行われず、綱紀地に落ち、人民乱を思う情を察するに足る可しと、日本出兵の必要を論じた。

「いよいよ自国の力で鎮制の見込みなきに至らば、兵を貸すの覚悟なかる可ならず。・・・支那兵と同勢力の兵を發して、対等の地位を占むべし。」

福澤も陸軍も同じく出兵を主張したが、陸軍は清国との開戦を最終目的として、福澤は清国と戦闘なくして収束すればさらに良しとした相違があった。

国王・高宗は周章狼狽し、戚臣の勧めで慌てて、清国に援兵を依頼した。

「朝鮮の文明事業を助長せしむ可し」(明治 27 年 6 月 17 日、時事) は、政府の出兵目的を明確にし補足するような内容である。

「日本の出兵に支那人朝鮮人は殊の外狼狽の色あるよし。支那政府兵を引くか更に増加するか知らざれど、我は頓着すべきに非ず。・・・外交官たるものは、日本兵の屯在の機に、彼の政府に談判して、我が人民の交渉事の渋滞なきよう保証せしむべし。さらに進めて承諾を求むべきは一つならず。・・・郵便、警察、教育も仕組みの一変を要す。陸海軍も我が国より教師を送り、軍艦武器を貸与して組織を改め訓練の必要あり。・・・朝鮮の文明を推進せしむる方針を決し、着々実行せんことを、我輩は政府と人民の区別なく、同意を求むる所なり。」

「日本兵容易に撤兵す可らず」(明治 27 年 6 月 19 日、時事) は、内乱鎮定すれば撤兵するが至当の順序なれど、我輩はなお引き揚げを欲せずとする。その理由は、

「我が国の維新革命は政府に実力ありて目的を達したれど、朝鮮政府に力なし。日本兵の駐屯は人民保護の為のみならず、朝鮮の文明進歩に必要な措置と知るべし。朝鮮の如き守旧一編の国にて文明事業の発起、百般制度の改良とあれば、種々の妨害の起きるは自然なり。・・・駐兵は必要なり。」

8. 内政改革

大鳥圭介公使は、明治 27 年 7 月 3 日、李朝に内政改革として、①統治組織の改革と人材登用、②財政整理と資源開発、③司法制度の改正と公正な裁判、④民乱鎮圧と治安維持の軍備、⑤教育制度の確立、の五項目を要求し、改革案調査委員の任命を求めた。

東学党の乱は鎮圧されたが、日清両国はすぐさま軍事衝突する危険がないまま、対峙する状況にあった。福澤は、朝鮮の独立は日韓の交渉事項であって、第三者の清国に関係なし、少なからざる兵力は、内乱再発を防ぐ根本からの改革を迫るためなり、と主張する。しかし「土地は併吞す可らず国事は改革す可し」(明治 27 年 7 月 5 日、時事)

と念を押した。

「強弱の両国相對して兵を動かせば、弱者の地を裂き強者の勇に帰するは古今の通例なり。朝鮮国の土地を日本併合するはなきやと疑うは、無理からぬ次第なり。我輩は日本国の政略にこの事ある可らずと断言して躊躇せず。……数年前我が国に隣国併合の議論ありしかど、人文の進歩と外交術の上達で、神后皇后、豊臣秀吉の旧夢を夢見る者なし。我輩が今回の出兵に土地併呑の意なきを保証する所以なり。」

日本政府が要求した改革案五項目は、根本からの治療であった。福澤がどの程度政府の日韓交渉過程を承知していたか分からないが、内政改革を実現させる為に、福澤は、連日のように、内政改革を督促する論説の筆を執って倦むことがなかった。

日本政府は「清国と共同で朝鮮の内政改革をやる事」を提案するが、清国は内政改革が自国にとって不利益となるので、日本の提案を拒否する。

福澤は「朝鮮の改革は支那人と共にするを得ず」（明治 27 年 7 月 10 日、時事）で、

「支那が朝鮮の共同改革を断りたるは我が国には幸いなり。支那は朝鮮を属邦視し、自立を實たらしめる心なきこと明白なり。そもそも支那の国情は朝鮮同様、文明進歩を認めず。……」と追い討ちをかけた。さらに、清国に開戦の勇氣なしと見ると、

「朝鮮改革の手段」（明治 27 年 7 月 15 日、時事）で、

「老大国を一撃することが、朝鮮の事大思想を打ち破り、改革をすすめる捷路なるが、我に対して戦を開く決心は覚束なきが如しと診断している。そこで眼中支那を見ず、諸外国に頓着せず、改革の期限を三年もしくは五年と限り、京城駐在の日本兵を文明開化の番兵とすべしとする。」と、日本が撤兵しない理由を明確にした。

その上で、福澤は朝鮮改革の支障となる「支那公使と支那兵の退去」（明治 27 年 7 月 17 日、時事）を求める。

「この改革の路に横たわって妨害するは不正物なり。支那政府は最初より反対す。その政府を代表する公使も、派出せる兵士も、共に改革国の外に退去せしむるは自然の順序なり。……改革の最中暫時退去せしむるのみ。」

この間、大島公使と李朝の改革案調査委員との交渉は、全て頓挫していた。又、京城は、日清開戦に向けた大詰めの段階を迎え、緊迫の度を増していた。

福澤が社説「支那朝鮮両国に向て直に戦を開く可し」（明治 27 年 7 月 24 日、時事）を掲載した時、既に軍事行動は始まっていた。

「……一刻も猶予せず支那を敵とし、我より戦を開くべし。是まで平和方針を取りたるは支那が直接の損害を加えざりし為なるが、李鴻章、袁世凱が手段を尽くして韓邸を教唆せし証拠は明白なれば、躊躇する所ある可らず。直に開戦を布告して懲罰の旨を明らかにすべし。……」

日本の出兵を各国の新聞は、それぞれの国益を背負って論評していた。

「我に挟む所なし」（明治 27 年 7 月 27 日、時事）は日本の立場の弁明である。

「もしも日本に何か挟むところありて漫に兵力を用るとあれば、疑いも致し方なけれど、

我に寸毫の異志なきは、眼あるものの疑わざる可し。・・・支那人断りたれば単独に行うものなり。」

9. 日清戦争

「日清の戦争は文野の戦争なり」（明治 27 年 7 月 29 日、時事）

「戦争の事実は日清両国に起こりたれど、根源を尋ねれば、文明開化の進歩を謀るものと、進歩を妨げんとするものとの戦いにして、両国間の争いにあらず。本来日本人は支那人に私怨なく敵意なし。世界の一国民として普通の交際を望みたれど、彼らは「頑迷不靈」にして文明開化を悦ばず、反対に妨げんと反抗の意を表したるが故に、止むを得ず事のここに及びたるのみ。」

福澤の軍事上の積極は、領土的な野心によるものではない。清国に対して決定的な勝利なくしては実効無しとする判断と、清国の朝鮮干渉を根絶せんがためである。

以下、「朝鮮の内政改革」に関する福澤の熱烈な論説を列挙する。

「井上伯の渡韓を送る」（明治 27 年 10 月 16 日、時事）で、改革の進まない理由に触れる。

「朝鮮国の革新甚だ疑う可し」（明治 27 年 11 月 3 日、時事）で、親日派の登用を示唆する。

「朝鮮政府は何が故に朴徐輩を疎外するや」（明治 27 年 11 月 9 日、時事）で、重ねて親日派の起用を勧奨する。

「朝鮮の改革」（明治 27 年 11 月 11 日、時事）は、大院君の声望に期待すべからざる理由に併せて、朴徐に依存する理由を説く。では、朴徐に依頼して何を為すか。

「破壊は建築の手始めなり」（明治 27 年 11 月 17 日、時事）と大英断を以って国の組織を根底から覆すべしとする。

「朝鮮の改革其の機会に後るる勿れ」（明治 27 年 11 月 20 日、時事）で、実行は今を置いてなしと、力説する。

さらに、「朝鮮の改革に外国の意向を憚るなかれ」（明治 28 年 1 月 5 日、時事）と、朝鮮のすきを狙うは支那のみに非ずと説く。

「日本の国力で朝鮮を併呑するは容易なれど、併呑は他を苦しめ我に利少なき故に見合わせ、独立せしめて、政略上に商売上に我が用に供せんとする。公明正大、毫も憚る所なし。況や朝鮮改革の一事で支那と戦争せしに、改革の途中で他の意向を云々して躊躇しては、世界の物笑いならん。」

日本は三国の勧告を入れて、5 月 5 日、遼東放棄を通告、5 月 8 日講和条約を批准する。福澤は「平和条約の発表」（明治 28 年 5 月 14 日、時事）で、世人は十人十色、不平なる者も多かれど、堪え難きに堪え、忍ぶ可らざるを忍び、国力の増進を謀るのみとした。

井上公使は、内政改革が捗らず、対韓政策の根本を確立する必要に迫られた。伊藤首相は 6 月 4 日閣議を開き、朝鮮問題でロシアと事を構える政策は採れずと、不干渉による現状維持に決した。

福澤の「朝鮮問題」（明治 28 年 6 月 14 日、時事）は、三国干渉以後の日本政府の退嬰的方針に反発した社説である。

「・・・日本は隣国の自立を助けんとして戦争したるに、束縛すること支那政府より甚だし、約束に背くものなり。日本答えるの辞なければ干渉を弛め撤兵の外なしと。」

井上馨は 6 月 20 日帰国し、閣議の不干渉方針を了承し、後任に三浦梧楼を推薦した。福澤は「朝鮮の独立ますます扶植す可し」（明治 28 年 7 月 5 日、時事）と政府の方針転換を再び牽制する。

「日本政府は朝鮮の助力を止めることに決心し、井上公使の帰朝も其の為なりと伝うる者あれど、・・・敗戦の支那は余力なく・・・差し向き事に当たるは露国なるべし。一旦朝鮮の国事に関係し・・・勢力を及ぼせば、日本の危機のみならず、東洋全体の均勢に偏重を生ぜん。・・・朝鮮の後見者を選びて野心なき国は日本を置いてなし。我が国は自衛の為朝鮮独立を助け寸毫も他志あらざるは、・・・責任を放棄するが如きは、断じて我が政府の行わざる所、国民の許さざる所なり。」

日清開戦から阿吽の連携を見せた福澤と政府の呼吸が合わなくなる。朝鮮の内政改革を文字通り戦争の目的としてきた者と、国際理解を得るための口実だった者の差が露呈したのである。

10. 閔妃暗殺

王妃・閔妃は、明治 28 年 10 月 8 日、三浦公使ら日本人により殺害され、遺体は庭園で焼却された。

福澤は「事の真相を明らかにす可し」（明治 28 年 10 月 15 日、時事）と糾弾した。又、公使館関与が明るみとなっても、「朝鮮の独立」（明治 28 年 10 月 30 日、時事）を繰り返し、主張する。

「今後の朝鮮政略は如何と云うに、東洋の治安の為朝鮮の独立を確むは、我が大方針にして、変わる事なし。・・・隣国の独立を全うする方針は、永久変ずることなく、実を空うせざらんを、我輩は飽くまでも希望する所なり。」

福澤は、閔妃暗殺事件の関係者全員が、広島地方裁判所で無罪となった時に、発言しなかった。福澤は、事件の真相を本当に知らなかったのであろうか？それとも、真相に目を瞑ったのであろうか？

「事件は、長らくマル秘扱いされ、三浦公使の首謀であることを裏付ける資料が公開されたのは、ようやく第二次世界大戦後であった。」（杵淵信雄著：「福澤諭吉と朝鮮」）

11. 「文明化工作への敗北宣言」

朝鮮の情勢は、福澤の予想通りロシア色を強めていく。小村寿太郎とウーベルが交わした日露覚書を確認する日露議定書が、明治29年6月9日モスクワで調印されるが、その一方でロシアは清国大使の李鴻章を優待し、6月3日に露清密約を結んでいた。

福澤は「対韓の方針」（明治31年4月28日、時事）で、事実上の「朝鮮の文明化工作への敗北宣言」をする。非常に分かり易く、謙虚な敗北宣言である。

「我が国の対韓略は一進一退、遂に今日の有様に及びたる失策は二個の原因にあり。

「義侠心」と「文明主義」なり。我が国が朝鮮の独立を扶植し、富強を助成したるは義侠心に発したれど、国と国の交際にはいささかの効能も見えず。この方は義侠心に熱中すれど、先方は毫も感ぜず、却ってうるさしと厭うときは如何するや。無益の老婆心を止めれば差支なけれど、可愛さ余りて憎さ百倍、一図に背恩を憤りて反対の挙動に出づ。明治15年の大院君の騒動（壬午軍乱）、17年の変乱（甲申政変）、27,28年の事件

（日清戦争、内政改革）の後始末は、いずれも我が義侠心に対する朝鮮人の報酬なり。人間の感情としては愉快ならず、憤慨の激するところが28年10月の結末（閔妃暗殺）なり。激憤は無理ならねど、本を尋ねれば漫に熱したる此のほうの失策なり。されば今後朝鮮への義侠心は一切断念するが肝要なり。朝鮮人は文思に乏しからざれば、教えて文明に導くは容易に似たりと、自国の経験に照らして同じ道を行かしめんと勉めたるに、頑冥不靈は南洋の土人にも譲らず。弊政改革を勧告して、内閣の組織を改め、法律裁判の法を定め、租税の法を改正して、日本同様の改革を行わんとしたるは、文明主義に熱したる失策なり。結果は日本を厭うの考えを起こさしめたに過ぎず。朝鮮には固有の習慣あり。腹痛に煎薬を服して腹巻で済ませたる患者に、卵巣水腫の病症なりと切開手術を施しても、医師の指示に忠実ならざれば全快を期し難し。斯かる患者には煎薬を服せしめながら、実験の効能を示して感化する外なし。朝鮮人には西洋医の心で漢方医の施療を行うが肝要にして、文明主義の直輸入は禁物なり。されば内政改革、独立扶植などの政治上の熱心を断念して、実物を示して自ら悟らしむ。実物とは顧問官にも非ず、練兵教師にも非ず、多数の日本人を彼の地に移して朝鮮人と雑居せしむるの一事なり。」

（参考文献）

- | | | |
|-------------------------|------|--------|
| (1) 日韓交渉史 | 杵淵信雄 | 彩流社 |
| (2) 福澤諭吉と朝鮮 | 杵淵信雄 | 彩流社 |
| (3) 閔妃暗殺 | 角田房子 | 新潮文庫 |
| (4) 福澤諭吉の哲学 | 丸山眞男 | 岩波文庫 |
| (5) 福澤諭吉の「脱亜論」
とその周辺 | 丸山眞男 | 福澤諭吉協会 |

以上